

関西社会経済研究所資料 06-07

文化懇談会  
「人間力」について

2006年10月

財団法人 関西社会経済研究所

ISBN 4-87769-092-1

## 序

将来への課題を考えると、単に経済的側面に止まらず、社会的な側面からの議論も踏まえ、考察を加えていくことが益々重要になってきています。当研究所では、こうした問題意識から、平成16年8月、様々なジャンルから14名の識者の方々を文化アドバイザーとしてお迎えし、文化懇談会を立ち上げました。今回はその第3回目として、「人間力について」と題し、活発な議論を展開していただきました。

本冊子は当日の懇談会の記録です。文化アドバイザーの方々の様々な立場からの見解をまとめたものとして、ご一読いただければ幸いに存じます。

2006年10月

財団法人 関西社会経済研究所  
専務理事  
事務局長 武 田 壽 夫

# 文化懇談会

## 「人間力」について

### 次 第

財団法人 関西社会経済研究所

日 時 2006年7月12日(水) 午後2時～5時  
場 所 社団法人関西経済連合会会議室

1. 開 会
2. 挨拶
3. 「人間力」について  
議長 鷺田 清一 氏 (大阪大学理事・副学長、教授)
  - (1) 論点の提示
  - (2) 自由討議
    - ・ 議 論
    - ・ 休 憩
    - ・ 議論・まとめ
4. 閉 会

#### 出席者

<文化アドバイザー> (氏名 50音順)  
有栖川有栖 氏 (推理作家)  
大谷 燮 氏 (NPO法人DANCE BOXエグゼクティブ・ディレクター)  
角野 幸博 氏 (関西学院大学総合政策学部教授)  
河内 厚郎 氏 (文化プロデューサー)  
川嶋 みほ子氏 (ロゴ有限会社代表取締役)  
孔 怡 氏 (キャスター、ラジオパーソナリティ)  
中西 寛 氏 (京都大学大学院法学研究科教授)  
鷺田 清一 氏 (大阪大学理事・副学長、教授)

#### コメント

<文化アドバイザー> (氏名 50音順)  
井野瀬久美恵氏 (甲南大学文学部英語英米文学科 教授)  
喜多 俊之 氏 (プロダクトデザイナー)  
北口 正人 氏 (株式会社阪神コンテンツリンク 常務取締役)  
根本 敏行 氏 (静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科教授  
兵庫大学経済情報学部経済情報学科 兼任講師)

## 目 次

### 1. 「人間力」について

(1) 論点の提示	1
(2) 自由討議～人間力の意義	2
① 人間力という言葉による強迫意識	2
② 企業力、行政力の代わりの人間力	3
③ 複数の人間力	4
④ 人と現場が合う社会の模索	5
⑤ アートにおける居場所と身体力	7
⑥ 花を持たせる社会	8
⑦ 社会の役に立つ意識と適応能力	9
⑧ エンターテインメントの世界における元気力	10
⑨ 東洋道徳の限界とライフサイクルの崩壊	11
⑩ 勤労観の喪失	13
(3) 自由討議 ～人間力を回復するために	14
① 外交における花の持たせ方	14
② 価値観の多様化	16
③ 多様化の危険性	17
④ 多様な現場の重要性	18
⑤ コミュニケーションと居場所	19
⑥ 人間力回復の取り組みと官民の役割	21
⑦ 職人的価値観と政治家的価値観	23
⑧ 競争による目の輝き	25
⑨ 現在の日本は目の輝きのない社会か	27
⑩ 3段階の人間力のフェーズ	28
(4) 総括 ～ワンオブゼムの再評価	32

### 2. 参考資料

文化アドバイザー名簿

## 1. 「人間力」について

### (1) 論点の提示（鷺田氏）

（鷺田） 昨年の「少子高齢化」に続いて、今年は「人間力」というテーマが与えられました。人間力というのはこの頃時々聞くようになった言葉ですが、だれが、いつ、どういう形で言い出したのかは、わかりません。例えば文部科学省等が初等教育でもっと生きる力をつけようというようなことを言い出したのが発端になっているのかもしれませんが。

ただ、人間力をそのまま分解すると人間の力ということですが、技術開発、自然支配、戦争、これも人間力で、ネガティブあるいはポジティブ、そのどちらも人間の力です。つまり、暴力や権力の力です。もちろんそういうものの回復ということはこの人間力という言葉で言われているのではないだろうと思います。おそらく我々が生きていく上での、あるいは社会生活をなしていく上での、あるいは国家運営、経済運営、社会運営をなしていく上でのある種の力が削ぎ落とされてきている、あるいは失ってきているという危機意識があって、それをどうすれば回復できるのかという意味で、この「人間力」という言葉が今の社会に漂い始めているのかもしれませんが。

先日、私自身は参加させていただけなかったのですが、関西経済連合会と関西社会経済研究所等が主催したシンポジウム「未来を切りひらく人づくり ～関西からの発信」がありました。秋山会長や本間所長も出ておられたシンポジウムですが、それに先立って童門冬二さんの基調講演がありまして、これを読ませていただいていたら、今日のテーマに関連する表現がありました。

童門さんがここで言うておられる言葉で私には一番魅力的で、的確だと思ったのは、「バブルで身につけた自分本位の考えが今は心の赤字になっている」という、「心の赤字」という表現です。一方ではバブル経済というのは非常に大きな動きでもあったのだけれども、それと共に人間の心の中に赤字が生まれてきていて、その赤字を清算しなければ大変なことになるという趣旨の講演でした。

この中で、童門さんは赤字補填しないといけないものとして2点を挙げられています。1つは「信頼」、もう1つは「思いやり」です。思いやりという言葉を上杉鷹山の書物の中から引いてこられて、そういうものが今は赤字になっているという発言をなさっています。そういう意味で何らかの力や、素質や、感受性が消えてきた、無くなってきたという、どこか危機感の裏返しとして、この人間力という言葉を誰彼なしに言い出しているのかと思います。

それについて、どんな力が失われているのかというような分析ももちろん必要になるでしょう。具体的にはこのシンポジウムがそうであったように、人づくりが必要だというような文脈で、この人間力が言われているということも考えられます。あるいは、河合隼雄文化庁長官が広められた元気文化力という言葉があります。経済力ではなしに、元気という文化力が必要なのだという文脈に載ってきている話かもしれません。あるいはもっと痛々しい場面、たとえば子供たちが何となく自分の存在が大切にされていないと思ったり、あるいは青少年、または若い企業人達がいくら頑張っても認められることがない、あるいはいつでも切り捨てられる可能性があるという不安を持っていたり、あるいは失敗

してしまったら終わりでサバイバルの道が見えない、仕掛けが見えない等、様々な不安の中で人がどのように生き延びられるか、サバイバルできるかという文脈にも引っかかってくるのかもしれないと思います。

ただ、人づくりにしても、元気文化力にしても、あるいは生き延びる力にしても、これをただ単に個人の能力の問題や気構えの問題といったところへ話を持っていくと、「最近の若い者は」という話になってしまいます。おそらくこれらは全部、例えば人づくりであれば教育システムの問題、元気文化力であればこの社会における文化活動の評価の問題、ボランティアという新しい市民のカルチャーとして定着しつつある力をどのように社会の中で活かしていくのかという問題にしていかなければいけないわけです。

それから、切り捨てではなく、やり直し、あるいはサバイバルの利く力も、心の問題というよりも、むしろやり直しの利く社会システムをどのように作っていくかという社会あるいは国家のシステムの方から見ていかないといけないと思います。単に心構えの問題、心の問題にしてしまうと、かけ声だけで終わってしまうと思います。

そんな中で、今日はまだ中身の確定していない言葉で皆さんと意見交換する時に、おそらく1つの語り方として、我々が意見交換する時に、我々がここ10年、20年、あるいは戦後社会の中でなくしてきた、失ってきた大事なものは何かというようなことを浮き彫りにする視点、あるいは視点までいかななくても今の世の中に対する感触について議論する必要があるでしょう。

そして、感触や視点を言いつ放しにするのではなく、そういう力がもし失われていたとして、あるいはまた今の社会にふさわしい、新しい力を身に付けていかなければならないとすれば、そのためにどんなことが可能なのか、どんな取り組みが可能なのかということも、やはり議論しておくべきかと思います。

ここに文化アドバイザーとして参集いただいている皆様は、それぞれの領域のウルトラ・プロフェッショナルばかりですから、評論家的に社会を上から見てというよりも、むしろそれぞれの場で実感されていること、感触の交換から始めたら、あまり浮ついた議論にならずに済むのではないかと思っております。枠組みをしっかり作ってから話をするより、まずそういう感触を、お互いにそれぞれの場所でどのように感じていらっしゃるかということから意見交換できればいいのかと思います。

## (2) 自由討議～人間力の意義（議長 鷲田氏）

(鷲田) まず、この「人間力」という言葉なのですが、お聞きになったことはありますか。また、それはどんな文脈でお聞きになったのでしょうか。

### ① 人間力という言葉による強迫意識

(角野) 各自が自分勝手に定義でき、あるいはしてしまいがちな言葉です。僕が理解しているのは、人間が本質的に本来持っているいろいろな資質が、その社会の中でどのように発揮され得るのか。むしろされていないのではないかという不安感を一人一人が持っている、本当はもっと私はできるはずなのに社会がそうさせてくれないという欲求不満の方に出てきてしまうということを個人的には感じます。そういう文脈で人間力と言っている

人もいると思ったことはあります。

特に最近では、それぞれの創造力や、個性を発揮しなければいけないという強迫観念を子供たちは皆持たされてしまっていて、逆に自分はこんなに能力、個性があるにもかかわらず、それを受け入れてくれない社会が悪いということにしまっている。だから、よく「自分探し」と言いますが、自分探しをする暇があったら仕事探しをしるというようなことを言われたり、人間力と言われ過ぎるがために、強迫されてしまっているような気がするのです。その辺りのことが非常に気になります。

それから、私が実際に係わっていることから見ていくと、都市計画という仕組みやシステムの作り方そのものが、急速に市民参加、住民参加、あるいは参加というよりも市民主導、住民主導にシフトしています。そうすると、ある市民は「よし、わかった、自分たちでやらないといけないのだ」と大変意気を感じて動き出すわけですが、そうではない人たちは、自分に本当にできるのか、私にはそんな能力はないし、そんな気分でもないと考え、そういうところでギャップができています。

そういう中で、僕らの仕事は市民をいかに自分で動いていきたいとさせるか、後ろから押す仕事なのです。ただ、押しがいのある人や町と、押したら倒れてしまうのではないかというような人や町があります。だから一概に人間力、人間力と言ってしまいがための強迫意識、不安感というものを現実のフィールドでは感じます。

(鷲田) 押したら倒れるというのは具体的にはどういうことですか？

(角野) 市民参加で、例えば公園の管理をしましょう、あるいは老朽化している自分たちが住んでいる町を、自分たちで計画を立てて動き始めましょう、まちづくりに頑張りましょうとお手伝いをすると、「よし、頑張りうぜ」と言う人はごく少数です。「そんななかなかわんから」と言って、例えば引越してしまおうとか、その場にいたたまれなくなって逃げ出す、あるいは無関心を装うということもあります。本当は関心があるのだけれども変に関心があるように動き出すと期待されてしまうから負担になるということです。

## ② 企業力、行政力の代わりに人間力

(大谷) 人間力という言葉は本当にここ1年位でよく聞く言葉で、現場の感覚からすると、企業力や行政力というものが失われてきた時に、人間力という言葉が出てきたのではないのかという気がしています。

僕はNPOを運営しているのですが、例えば助成金の申請や補助金等、様々な形でファンド・レージング（資金集め）をしていく時に、大阪府も大阪市も文化予算は年々減っています。要するに、企業もそうですが、お金での援助が増えていないのです。企業にしる、行政にしる、全く文化に興味がなくなったわけではなくて、何かの形では援助をしたいと思っている。

その時に、企業では非資金的なメセナが増えているのです。例えば、トヨタ自動車が昼間に空いている体育館をアーティストに開放する。社員の就業時は使っていない場所ですから稽古場として使えるということです。あるいは、去年前橋であったアート・フォーラムで、地域の清掃業者がそこにある古いビルを使うために、清掃のノウハウを市民ボラン

ティアに教える等、そういう形での非資金的なメセナの広がりは大変いいことだと思うのです。

例えば行政との関係にしても、泉北地域の町をアートを使って活性化できないか、再生できないかという試みとして、以前泉北アート・プロジェクトをやったときに、初年度は大阪府の都市調査という予算がつかしました。いわゆる大阪府下の遊休空間8カ所を実際にどうしたら面白い場所にできるかということ进行调查することと、アーティストがそういう既存の施設ではない場所でどういう活動ができるか、あるいはしたいかという意識調査をやったのですが、次の年に大阪府からの予算がゼロになったのです。せっかく1年間、大阪府とNPOが共同して調査をしたにもかかわらず、次の年に予算がゼロになった。その時大阪府の方の提案で、内閣官房の都市再生モデル事業という公募事業に応募したら、運良く通ったのです。大阪府からはそのプロジェクトに対してお金は一切出ないけれども、府の人たちのいわゆる労働力と、行政が持っているネットワークを提供してくれて、協働することができ、お金がない場合の協働のありようとして、そこに人間力があつたということです。その時の大阪府の方は、生活文化課の人、あるいは計画課の人、それから、いちばん面白かったのは土木課の人です。普段土木をやっている人達は現場で仕事ができる人達で、非常に強いのです。アートも実は現場力がないとできないので、その時にある意味での人間力というものを感じました。

今なぜ人間力かといわれる時に、端的にいうと、そういう1つの企業体、あるいは行政力自体が弱体化している時に、そこにいる個人個人が、企業人であり行政人である個人と、例えばアーティストや市民が、どうつながっていくのかということに人間力という言葉が言い出されたいわれがあるのかと思っています。

(鷺田) お金という資金の代わりに人間力という財産で補填するというニュアンスですね。

### ③複数の人間力

(角野) 最初にその話をしなければいけませんでした。例えば市民参加のまちづくり、市民主導のまちづくりといったときに、その市民というのは一体だれなのだという議論が必ず出てきます。そうすると、まず1つにはそこに住んでいる、夜間人口としての市民というのがいることは間違いなく、それが普通中心になるのですが、例えば昼はその方は公務員であることがあります。同じ都市でまちづくりにかかわるとしても、公務員としてまちづくりにかかわっている人が、夜は一市民としてかかわるというように、1つの肉体に複数の人格を持っていることがあるわけです。あるいはボランティアやNPOで、実は私はこういう仕事をしているのでこういうノウハウ、こういう知識を持っている、だから、それを仕事として出すのではなくて住民として出しましょうという形で、いいチーム編成ができる場合があるのです。

それがただ単に夜間住民としての人格だけではなかなか動かない。具体的な提案力がない場合があります。だから、僕らが話している時には、昼間はあなたはどこかの市役所の方かもしれないけれども、夜は市民として少し手伝ってほしいという話をするケースがあります。

それと同じように、企業市民がいるわけです。企業市民とは、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、大阪の市内のまちづくりでも、例えば御堂筋を考えるグループや、あるいは船場を考えるグループという人たちを言います。それぞれはサラリーマンで、その人たちがいる部分会社を背負っているのだけれども、そこでまちづくりにいろいろな形で参画していく。だから、まちづくりで人間力という言葉を使う際、1人の人格、1人の肉体に実は複数の人間力や顔を持っていると、話が非常に面白く展開するケースがあります。

そういうものをプロデュースしていく側としては、結局、一人一人のいくつもの資質や、いくつもの顔をどれだけ引き出すことができるかというあたりが、面白いけれども難しいところですね。

(鷲田) ということは、裏返していうと、例えばその人が昼間、市役所の職員だとすると、そのプロフェッショナルだけ活かすというのは逆にマイナスになります。それも使わなければならない、活かしてほしいけれども、それだけの顔になったら意味がなくなってしまうわけですね。

#### ④人と現場が合う社会の模索

(有栖川) 今のお話につけて話したいこともあるのですが、その前に、人間力とは、と聞いたときの率直な感想から言いますと、こんないい加減な言葉で何かを語ることはできないということです。「自分探し」という言葉を使う小説家はいないと思うのです。彼は自分探しをしていたとすれば、また、人間力も彼の人間力はなかなかだというような表現を使えば、その瞬間に作家ではなくなると思うのです。

それでは、人間力という言葉からどういう力を連想しますかという、割と気の利いた解釈比べになるような言葉で、雑な言葉なのですけれども、雑であるが故にその後の発言者がどの側面をとらえるかとか、今何を重要と思っているか、その語る人の問題意識というのをあぶり出す言葉であると思うのです。しかし、投げかけられた方としてはどう答えたらいいかということがあります。

同じような言葉で、「生きる力」というものがあります。これはあきれた言葉で、学校で悲惨な事件が起きると、特に少年犯罪などが起きると、中学や高校で先生が講堂に生徒を集めて、命の大切さを訴えたりする。命の大切さという言葉について、この前驚いたのは、児童が犯罪に巻き込まれて被害者になった際、先生が講堂に生徒を集めて命の大切さを訴えたということです。命の大切さは加害者である大人がわかっていないのであって、児童が被害者になっているのにもかかわらず、命の大切さを児童に先生が訴えたのです。大人が子供を殺したので、僕らはびっくりしている、どうして先生は僕らに命の大切さを説くのですかと、私が子供だったら突っ込みたくなると思うのです。このように、学校の先生というのはものを考えないし、マスコミも報道しながら何も疑問に思わず、命の大切さという言葉は雑に使われているのです。

人間力が足りないと言われたら全人格否定ですから少し怖いと思いますが、人間力という言葉は、参加者にあなたは何をもって直面している問題を問題としてとらえていますかというような参加者の意識を問う質問としては有効かと思います。

現にお2人の先生のご意見を伺って、もう既に納得できることがいくつもありました。

大谷さんは現場力という言葉をおっしゃって、そういうふうにとらえているのか、確かに現場で何ができるかというのは大事だと感じました。その現場というのは何かというと、角野先生がおっしゃった、誰でも昼と夜とは顔が違うし、いくつもの資質を持っている、要するに、現場というのは無数にあるのだと思います。

私が人間力という言葉が投げられたときに思ったのは、私にはどんな人間力があるのかということ、それは時と場所によって大きく変わることです。例えばこういう錚々たるお歴々の中に出てきて、マイクを持って今話しているのですけれども、私が格好がついているのだとしたら、この現場ではそれなりに力を発揮できているのかと思います。ただ、別の現場、例えば修羅場のような工事現場に行くと、あれを運べ、これを運べと言われたら、何をどこに置いたらいいか、瞬時に判断するとか、一生懸命やりたいのだけれども見当がつかないほど、そういう現場は弱い。それから、体育会系的な雰囲気のある現場でも消えてなくなりたくなります。そういうところへ行くと本当に自分は無力だと思うのですけれども、自分がよく知っている専門分野のフィールドでスピーチをしると言われたら、結構人を感心させることはできます。

だから、人間力といっても、結局、どこの場面でも力を存分に発揮できる人なんていないわけです。私はこの現場だったら任せてもらっても大丈夫です、よくやったと言われる成果を上げる自信はそこそこありますという現場は、本来、人間はみんな持っていると思うのです。そういう現場に立てるかどうかが問題で、自分が力を十分に発揮できるフィールドに立つことが、なかなか事情が許さずにできない、あるいはそうさせてもらえないというときに、人間は大変不幸だと思うのです。

だから、実は現場というのは取り様によって沢山あって、あなたにはあなたに合った現場が必ずある。どんな現場でも力を発揮できる人がいないように、どこへ行っても通用しない人もいないと思うのです。だから、どこへ行っても使えないと思われたり、自分で思っている人はそういう現場と巡り合っていないからであり、そういう人をいろいろな現場にアジャストさせるのではなくて、ここではない、ここではない、ここだったというように渡り歩くこと、そういう現場と自分の力が一致するまで探ることが許される状況、そういう社会の仕組み、あるいはものとのとらえ方をすれば、人間力という言葉はかなり有効だと思います。人間力というのもしっくりときませんが、いわゆる人間力を発揮できるのはこういう現場であり、彼、彼女がそこへできるだけ苦勞せずに辿り着けるように皆で互いにサポートし合う、それに対してみんな共通の理解を持つ社会が、相対として最も人間力がある社会になると思うのです。

だから、それぞれが教育の現場で、あるいは家庭で人間力をどうしたら磨けるか、高められるかという話になると、皆が結構つらいプレッシャーを感じる。個性を発揮しろと言われるプレッシャーというご発言もありましたが、個性を発揮しろ、人間力を出せと言われたら、これほどつらいことはないと思うのです。人間力がないようですと自分で認めないといけないというのは悲惨な結果です。

自分の力、可能性を発揮できる人と現場が最も合う社会を模索できる環境を整えることが、結局、社会全体の人間力を向上させることなのだと思います。それ以外に人間力が高まるメソッドはないのではないかと今、思いました。

(鷺田) ある種現場を見つけられている人からいえば現場力ですが、見つけられていない人は、よく「私の居場所」という言い方をします。

(有栖川) 私は家内に時々、「あなた、推理小説を書いてお金になる社会に生まれてよかったね」と言われます。こんなものは何の役にも立たないという社会の方が世界中には多いわけで、あなたの書いているものが人を楽しませて、報酬が得られる社会に生まれてよかったというわけです。これは皮肉でなく、純粹によかったと言ってくれているのですけれども、私もそう思います。

だから、自分は運がよかったけれども、そこへ行くか、行けないかは、その人の徳が高い、または善行を積んだからというのではなくて、本当に偶然や運という要素が非常に多い。その偶然性をなるべく減少させるということです。あなただったらここがいいのではないかということを見つけやすい環境が必要です。自分はよかったけれども、他の人を見ていると、こういう言い方は傲慢に聞こえるかもしれませんが、大変そうだと思います。特に若い人を見ると、もう1回やり直せと言われたら自分はそれは少し勘弁してほしい。まだここから頑張るほうが若い頃からやり直すよりよほどいい、ここまで来るのも偶然が作用したのだからと思ったりもします。

#### ⑤アートにおける居場所と身体力

(大谷) 自分の居場所を発見していくということなのですが、私は定期的に小学校や中学校の総合的な学習の時間を使って、ダンスのワークショップをやっています。これはコンテンポラリーダンスのワークショップと言うのですが、コンテンポラリーダンスとは、入り口はヒップポップやパラパラなど何でもいいというものです。

現場に行ったときに、まず形を教えないので、自由に動いてくださいと言います。ただ、そこで風になりなさいと言うとまたこれが難しいのですが、最初に講師になるアーティストがまず踊ってみせるのです。「これはプロやで」ということをまず見せる必要があるのです。これは長年の経験で、普通のお兄ちゃん、お姉ちゃんだと思ってしまうと、なかなか尊敬しないのです。どこかで少しだけ尊敬してもらうため、これはよく踊れる人だということを見せ、それから「じゃあ、こんな踊りを踊ってみようか」ということで一人一人のテーマを与えながら、それは踊りというよりも寝ること、起きること、歩くこと、走ること、他人に触ることというような、大変シンプルな行為性から始めていくのです。

そういう中で失敗もするのですが、失敗をするのは見学者がいる時です。体で表現をするということはかなり恥ずかしいことだと思うのです。自分が心も体も裸になっているところに信頼できない他人が入ってきたら非常にとまどってしまう。去年、ある中学校である企業の協賛金を得て授業をやっていたのですが、その企業の方が見学に来られたのです。背広を着た人が7～8人どっと入ってきた。1ヵ月かかってようやく子供たちの気持ちがほぐれていた時にそういうことが起こってしまうと、もう1回殻に入ってしまう。

ただ、そういうワークショップを小学校や障害者の施設などいろいろなところでやっていく中で、ふだん彼らが学校で経験している価値観とは違う価値観が世の中にはあるのだということを見つけてくる生徒、学生がいるのです。ふだん学校のシステムの中では全然

目立たない子が、ダンスのワークショップのときに突然スターになってしまうことが起こって来たりする。今の学校の現場のシステムの中では自分の居場所がない子が、そのワークショップの中では居場所を発見することができるのです。

そういう子が出てきたときに、ふだん勉強できて目立っている子が逆に嫉妬するのです。その子にもどうやって花を持たせるか。まず初めは自分を発見するということから始めるのですが、何となくふだん目立たない子が目立つことによって、目立っている子が目立たない他人ということを発見していくことにつながる。そこで明らかにふだん目立っている勉強のできる子と目立っていない子にペアを組んでもらって、2人でダンスを作るというようなことをやるのです。すると、そこである種の共同性のようなものが出てくる。それは、そういうアートというものが通常の価値観ではない新しい価値観を持っているということです。

もう1つは、僕が扱っているのはダンスという身体表現ですから感じるのですが、今の子供たちの体というのは非常に閉じているのです。これは、例えばテレビゲームやネット上で自分の意識の中で作ってしまう身体のようなものとリアルな身体というものがある。ネット上で通信などをしていると、ある種のリアリティを持っている身体とってしまうのです。でも、リアルな身体こそが身体であって、頭の中で形成される身体は身体ではない。だから、できるだけリアルな身体に戻れということ saying いたのですが、どうもその理屈は通じない。やはり二重の身体を生きているということのバランスをどこで保ってきているのかということ、ダンスのワークショップなどでもやります。

例えばバーチャルな身体には痛みがない。テレビゲームの中で格闘して相手を殺したり殺されたりしてもそこに痛みは伴わないけれども、実際に人をどついたら痛いわけです。そういう特に身体を媒介としたアートのワークショップをやっていくことで、徐々に子供個人個人が持っている身体力のようなものが発見されてくる。その身体力は、ひょっとしたら人間力ということにつながるのかもしれないということです。そして、そこにはもう1つコミュニケーション力が人間力につながっていくのではないかと思います。

自分のことを言うと、最近だんだん年を取ってきまして、物忘れは激しいし、物覚えは悪いのです。ところが、「まあ、ええやんか力」のようなものがついてくるのです。何かで議論をしたり、コンペをしたりするときに、このダンスはどうだこうだと議論される。それはわかっているが、1人の作家が毎年ミリオンセラーを出せるわけではなくて、一生のうち代表作は1本か2本しか出されないのだから、もう少しゆっくり見てあげたらどうかということ言えるようになってきたのです。それはそのコミュニティの中で私が今後老人として生きていくために多分必要な生き方だろうと思うし、コミュニティにとってもそういう老人力のようなものが必要とされている。ある種の緩和剤になっていくというようなことを、最近実感として少し感じています。

## ⑥花を持たせる社会

(鷲田) 今の太谷さんの言葉で、いい意味で引っかかったのは、「花を持たせる」という言葉です。今の社会というのは個人のレベルでも、企業レベルでも、勝ち組、負け組とよくいますが、これは花を持たせるということが全然ない、負けた方が悪いというカルチャーです。

確かに現場にはいろいろな人間力があると思うのですが、人間力というときに1つの側面として花があるという。あの人は花があるのかという、それはどうしようもないものです。その人が努力して花というのはできるものではないけれども、あの人はこの場所だったら輝くとか、今のお話のダンスのときに、ふだん全然花がないのに、ここに来たらふっと花が立つ。それが大変重要だということを皆知っているからこそ花を持たせる。今は花がないけれども花を持たせるという慮りがかつては文化としてあったような気がするのです。

ある研究会でゴリラの研究者の人がおっしゃったのですが、ゴリラも花を持たせるのだそうです。ゴリラの社会こそ勝ち組、負け組が強烈に浸透している社会で、かつてのボスは老いぼれて目が見えなくなったり、よたよたとしか歩けなくなったらグループから放り出されて、餌の残りをもらう、集団の外側にいつも寄生しているボスになるのだそうです。ところが、ゴリラはもうそろそろ元のボスが危ういと感じると花を持たせて、集団が移動するときに最前列、トップにそのゴリラをやらせて、後ろからついていくふりをする、一応立てるということを教わったことがあるのです。だから、動物ですらそういう花を持たせるという慮りがあるのかと、そんな話を今ふと思い出しました。持たせないと、花というのはそう簡単に努力して身につくものでもないです。

#### ⑦社会の役に立つ意識と適応能力

(川嶋) 私はいろいろ文を書く仕事をしているので、人間力に関する講演なども聞いています。でも、その話をしたら全く請け売りになるので、少し私なりの解釈で自分の体で感じていることを、お話ししたいと思います。

私は少し前までOLをやっていて、OLから仕方なく会社の経営者という立場になったということで、いろいろと感じていることがあるのです。今、仕事をする時に最も自分の原動力になっているのは、なぜかわかりませんが、「社会の役に立ちたい」ということです。昔は会社に勤めているから、その会社の看板があるので、社長や会社の看板などの下でほぼ庇護されて働くことができたけれども、今はそういうものがなくなって、どこのだれかわからない女性が1人で働いていこうと思ったら、自分が社会の役に立ちたいと思って、あるときに「この仕事だったらあの人に頼んだらやってくれる」と思い出してもらえる、それがまたとても幸せなのです。できる仕事、自分の可能性も全くわからないですけれども、「こういうことができるか」と聞かれて、「仕事の範囲だから、ちょっと新しい分野になるけどやってみる」と言っていて、実際にやってみたらできたということの繰り返しで、喜んでもらえ、次からもまた新しい展開があって私もうれしい、そういうのがあると思うのです。

例えば、この間も出版の関係で手伝わせてもらったことがあったのです。私が文章をチェックしたときに大変大きな間違いを見つけて、致命的なことになる前にきちんと直すことができました。それに対して、「大したお金ではないけれども、これだけ払う」と言われたのです。私はどう考えても自分の力は大したことがないから、「そこまで払ってもらっては」と思ったのです。よく近江商人は「三方よし」と言ったけれども、そういうこともあるので、「それはいくら何でも高すぎるから、せめて半額にしてもらえませんか」と言っていて、半額にってもらってまけてもらったのです。

(鷺田) それはまけてもらったと言うのですか (笑)。

(川嶋) 「三方よし」という言葉は、昔聞いたときには安っぽい言葉だと思ったけれども、社会に存在して働いていくにはそれが非常に大事だということを、今は実感しているのです。

もう1つ、仕事を通じて思うことは、例えば社員を採用するときに、今の子は大学で特に要領が良く就職活動もきちんとやっているから、履歴書をどうするとか、年長者にはどうしゃべるとか、表面的には非常にきっちりしています。でも、それだけでは見抜けないものがあり、パソコンができようが、英会話がペラペラであろうが、字が大変きれいだろうが、それをもとに採用したからといって、その社員が役に立つとは限りません。実際に役に立つのは、少々英語ができなくても、気働きができる子、すなわちその場の空気を読んで動ける子が最も役に立つのです。だから、人間力とはつかみどころがないけれども、結局、そういうところかと思うのです。

先ほど船場の会の話なども出ていましたけれども、私も社会の役に立ちたいという一環で、「せんばGENKIの会」に入らせてもらって、アフター5に皆さんと活動しているのです。そのときの皆さんの働く動機になっているのは、町を愛することです。町を愛しているから、自分の力をボランティア的に発揮して役に立ちたいと思っているのです。まだなかなか活性化まではいっていないけれども、このまま進めていき、私はこれからもかわりたいと思っているのです。

結局、人間力とは何かということになると、先ほどから言っているように、私が必要であると思っている人間力は、社会の役に立つこと、自分の町を愛すること、それから、社員を採用するときなどにもよく思う、空気を読んだり、気働きをしたり、適応能力があるということです。またもう1つは、鷺田先生が言われた花を持たせるという部分は、先ほどの金もうけの問題ではないですが、自分も幸せで、相手も幸せで、相手も存在できる場を作ってあげるということ、全体を見渡すバランス感覚も人間力に入るのかなと思っています。

全国にあった石田梅岩の心学の学校の中で、大阪には石門心学が残っているのです。心学明誠舎です。私はそこにも入って最近勉強させてもらっているのですが、そこで先ほど鷺田先生が言われた花に関係のあることが出てきました。石門心学の基本というのは、正直、勤勉、儉約、親孝行ということと、「孝悌忠信」すなわち年長者に仕える、年長者を大事にすることと真心という、基本はその2つだけなのです。それが私のこれまで考えてきた人間力というものと結びつくのかという感覚がしています。

## ⑧エンターテインメントの世界における元気力

(鷺田) 孔さん、人間力という言葉はラジオに出てくるのですか。

(孔) ラジオに人間力という言葉はあまり出てこないです。でも、ラジオは映像がない世界なので、その中でその人のパーソナリティでどこまで逆に聞いている人を引きつけるか、また、どういうふうにいるいろいろなものを引き出していけるかという部分がありますの

で、もし単純に結びつけるならば、人間力というところがあるかもしれません。

ちょうど今韓流ブーム、華流ブームというのがありまして、そういったブームの中でもそうですが、ラジオの中で何かを紹介することによって、ファンの熱意は本当に恐ろしい位で、そこにむしろ人間の力というものが潜んでいるわけです。強いてラジオでいえば、そういうところがあるのではないかと思っています。

今日、台湾のある歌手が来ていたのです。今は華流とって、深夜のどのチャンネルも台湾のドラマなどをやっているのですが、台湾の4人組の格好いい若い子がいて、その中の1人が今日WTCに来ていたのです。彼とのインタビューが終わって一歩外に出たら、下のフェスパを人が埋め尽くしているような感じで、キャーッと呼んでいたのです。そういった場面はテレビなどでは見たことがありましたが、実際に目の前で、普通の人がキャーッとそこまで言われるのは初めてで、これはすごい、どこからこんなパワーが出てきているのかなと感じました。それも逆の意味合いで、1つの人間のパワーというものではないかと思えます。

そういったブームのファンだけではなく、ふだんのラジオの中でもそのパーソナリティのDJの語り口、あるいはどこかで人間性が出てきているという部分によって引きつける。そして、また、そこでお互いに影響をし合う、与え合うという部分は、映像がない世界の中では逆にある部分、人間力がそこで潜んでいるものではないかと思えます。

(鷺田) 最初に、よく似た言葉でちらっと元気という言葉を使ったのですが、そういう元気を引き出すような力というイメージに近いですか。

(孔) そうですね。エンターテインメントの世界、ファンの皆さんの世界では、まさにお互い元気を与え合うのです。なぜかという、リスナーから一杯いろいろなメッセージが来るのです。あるコンサートを見ることによって、好きな歌手の歌を聴くことによって、ずっと悩みを抱えている自分がそこで力を、元気をもらったという話、メッセージがあるのです。一個人のメッセージに限らず、たくさんそのような話があります。

歌手にインタビューしていても、実は自分がこうやって元気にやっている中で、たくさんのファンがそこまで応援してくれるという元気を私はもらってできているという話があり、お互いに元気を与えてはもらっている。そういった現象になっているのではないかと、このように感じています。

(鷺田) 我々としては、別に人間力という言葉売り出す使命があるわけではなく、むしろこういう言葉が何かを指すものとして流通し始めているときに、我々それぞれ全然違う現場を持っている者がそれに素直に反応して、その言葉がまた関西社会経済研究所の会員の方々に届けばそれでいいことで、まとめる必要は全然ないと思えます。

## ⑨東洋道徳の限界とライフサイクルの崩壊

(中西) 子供について学力という言葉があって、学力をつけるのは学校の教育だと従来されてきました。僕の間力という言葉のイメージは、特に教育の面でいうと今の子供、若い人も含めて、学力の面やあるいは技術の面はいろいろとあるのだけれども、社会生活

とか、従来、常識として必ずしも学校で教えたりするようなものではないような部分が足りないのではないかとこの感覚があって、人間力という言葉を使っているのではないかとこの気がします。

最近、話題になっているような20~30代の人の事件では、簡単に親を殺すということがよくあります。いろいろ不満になる原因はあるのでしょうけれども、私も40過ぎですが、少なくとも私の世代的常識と比べて、いくら親に不満があっても親を殺すというのは今伝えられているような程度のことではなくて、家出をする等して縁を切るということでやっていけばいい話なのに、なぜ親を殺してしまうのだろうと素直に思うのです。人間力が欠けているという表現が適切かどうか分からないですが、ある意味でそういう嫌なことがあっても、ある種の道徳的な常識の範囲内で対処するといった行動ができないという面では、人間力が欠けているということなのかという気がします。

そのように仮に人間力を定義して、それをどのようにしてつけたらいいのかというのは、私よりもここにいらっしゃる皆さんのほうがよくお考えだったり、実際の経験をお持ちだと思えるのですが、私が思うことは2つ位です。

1つは、先ほど川嶋さんがご指摘になっていましたが、少し歴史の本を勉強すると、心学や適塾等、大阪ではそのようなものですが、日本全体としてある種の道徳運動が起きたのは、18世紀位のようなようです。18世紀頃に戦国から江戸になって大分世界が落ち着いてきて、元禄などの時代になるわけですが、その頃に本格的に日本の知識人が儒教や伝統的な仏教、その他のいろいろな生活の知恵といったものを改めて問い直して、武士は武士の生き方といういわゆる武士道という形で考えられていくわけですが、都市の住民、いわゆる町民がどう生きるのかという生活倫理のようなものも作られていって、それが塾などを通じて普及していくのです。ですから、日本が比較的治安がよくて平和な社会になるのは、ある程度そういう教育啓蒙活動が普及した18世紀のある時期以降だということを読んだのです。

そういうことから言うと、今日我々が人間力、社会常識のようなものが少し変わってきている、あるいは特に若い人にないののではないかと感じたりすることの1つの理由は、そういう江戸時代にできたある種の行動規範が伝えられなくなってきているからだと思います。その一定の部分は、1つは実体験としての社会生活をする機会がかなり減って、家庭と学校の間にある社会的経験が少ないということで、バーチャル・リアリティ世界の方に行っていたりするわけですね。その世界では自分の好きなようにやれるので、人の痛みがわからない、命の大切さを知らない等と言われるようになってきていると思います。

もう少し一般的に言うと、18世紀の頃に西洋文明を受け入れていくときの基礎になる東洋道徳、西洋技術という考え方ができるのです。つまり、道徳は日本やアジアが比較的いい。けれども、技術は西洋から来るものが多いということで実学が次第に発達していき、大学ができて、そういう枠組みが明治以降も続いていくが、その東洋道徳、西洋技術という枠組みが少し限界を迎えている。技術の方があまりにも進みすぎて、東洋道徳が社会生活を通じて伝えられていた、あるいはインフォーマルな教育を通じて伝えられていたものが、伝えられなくなっているということかだと思います。それが1点です。

もう1点は、長い目で見て、日本人の人生は70歳ぐらいまでは現役で暮らして、そのあと30年前後は自由という時代になってきましたから、20代で大学を出る前後で社会人として一人前になって暮らしていくというライフサイクルではなくなっているのではない

かということが、実感としてあるのです。ニートとか、フリーターとか、そういう人の問題もあって深刻だというのですが、大体30代前後ぐらいまではみんな自分探し、すなわちある程度社会生活を行い、給料をもらいながらも自分を教育する道を求めていて、大学院のMBAやロースクールなどに行ったり、仕事はするけれども辞めてまた別のところに移ったりという状態なのではないかと思うのです。

そういうライフサイクルの中で、どのように自分の人生を生きていけばいいのかというロールモデル、目に見えやすいモデルのようなものが昔はもっと短いライフサイクルであって、親がこうやっているから自分は今こういう位置にあるということが何となくわかったと思うのです。ところが今は、昔のライフサイクルは崩れているのだけれども、新しいライフサイクルのモデルがないので、若い人にとっては今どのように生きていけばいいのか分からない。ある種、刹那主義になっている面もあるのではないかという気がします。

(鷺田) どうもありがとうございます。やはりイメージするものが随分皆さんいろいろ違うのでとても面白いですが、最初に角野さんがおっしゃってくださったことは、中西さんが最後におっしゃってくださったことに丁度つながります。中西さんが新しいライフサイクルのイメージができていない、あるいは自分が社会の中でどういう役割を果たすのかという、そのロールモデルが非常に見えにくくなっている。あるいはまだできていないということがある。そうすると、その1つ前に川嶋さんがおっしゃった、役に立ちたい、あるいは自分が何かの役に立っているということが実は生きるときのいちばん元気のもとになるということですが、その役に立つというのが要はロールです。それが見えない、あるいは自分の周りでそういうことを確認できるところにうまく遭遇できていない、自分がその場所にはいないという問題で、いろいろな意見が出ましたが、ずっと数珠つなぎになっていて、今、言ったそういう役に立てる場所にまだ自分が立てていないというのは、自分の現場あるいは自分が力を発揮できる現場というのにうまく遭遇できていないという、その前の話につながっていきますし、さらには自分がここにいることが役に立っているのだと感じるときに、普通なら期待されたら期待にこたえるという形でこたえるのですが、角野さんが最初におっしゃったように、今の時代は期待が負担になっている。こう考えてみると、1つの人間力という言葉、今日の題目をきっかけに話していたときに、何かずっと数珠つなぎになっている感じがありました。

後半では、我々はそれぞれの場所からそれぞれの立場で今の社会を見ていて、こんな大事なものが実は非常に弱くなっている、あるいはうまく成り立たなくなっている。ではそれをどうするかという問題を考えていきたいと思います。あまり抽象的にではなく、それぞれの場所で、例えばこんなことをしたらうまくいったとか、あるいはこんなことが非常に有効だという具体的なレベルでもう少し、ではどうするかという話を考えてみたいと思います。

休憩に入る前に少しだけ、この間のシンポジウムで話題になったことを仰っていただけますか。

#### ⑩勤労観の喪失

(武田) 最初に先生のおっしゃった心の赤字の話など、エッセンスは今の話の流れのス

トリーの中でおっしゃっていただいているので、今さら私が付け加えるものはありません。今は働くにしても何をやるにしても、そういうことに対する義務感というものが欠けてきているのではないかというような指摘がありました。それからまた、居場所という話もありましたが、それは高望みという点が一方であるのではないかと思います。つまり、いろいろとやってみて初めて見つかるのだけれども、こうあるべきという意識があって、自分にふさわしい仕事かという議論になった場合、自分のために働くとか、自分にふさわしいかという意識ばかりが勝ちすぎているのではないか。やはり働くということの原点としての義務感、一種の勤労観、そういったものが失われているというところでもう一つパワーが盛り上がってこない。特に若い人を中心にパワーが盛り上がってこないという点があるのではないかということ、経営者からの目ということで少し付け加えておきます。

(鷺田) わかりました。それでは20分ほど休憩させていただきます。

～ 休憩 ～

### (3) 自由討議～人間力を回復するために（議長：鷺田氏）

(鷺田) ここからは人間力という言葉にこだわらない形でやりたいと思います。でも、有栖川さんが言ってくくださったように、この言葉のおかげでそれぞれ何が大事だと思っているか、あるいは今最も大事な動きは何だと思っているかが自ら浮き上がってきて、良かったと思います。

それで、私は最初にも少し紹介させていただいた童門さんの言葉が結構言葉として気に入っていて、それはバブルの中でできた「心の赤字」という言葉なのですが、「心の赤字」というのはなかなかしゃれた言葉だと思ったのです。後半では我々の赤字というのは何だろうということと、そして何をしたらいいのだろうということ、あまり大きな政策ではなしに、議論させていただければと思っています。

最初は、先ほどの議論の中で、これは極めて個人的な関心からお聞きするのですが、中西さんに聞きそびれたことがあって、人には花があるというだけではなく花を持たせるというカルチャーがあったという話が出ていましたが、国と国の間で、外交というのは花を持たせるというのが大きなポイントになってくるのでしょうか。

#### ①外交における花の持たせ方

(中西) それはその通りだと思います。特にリーダーになる国は、いろいろな外交交渉をうまくまとめていくに当たって、大体リーダーやボスといった国が話を最終的にはケリをつけるということが多いのです。

その過程でそんなに大きな力を持ってないけれどもアイデアがあったり、何か実績を作っておきたいというので動く国がたくさんあるわけです。そういった国に対してボスのような国が、どの国が非常に頑張ったから今回はうまくいった、この国の出したアイデアが素晴らしいなど、外交官なりにいろいろな形で言ってあげることが、長い意味でボスのリーダーシップをつなぎ止める仕組みなので、それは外交の基本的なテクニックではない

でしょうか。

(鷺田) それは今もきちっと機能しているのですか。

(中西) 必ずしもそうとは言えないと思います。基本的と言いましたが、常にうまくいくというわけではありません。ただ、アメリカやヨーロッパの国は普通やります。言い方に語弊があるかもしれませんが、国際社会の中で自分がきちんと認知されていないと思う国ほど自分がやったということを言いたがって、ほかの国がやってくれたおかげでというふうに花を持たせることがなかなかできないということで、外交力として少し足りないという1つの現われになるでしょう。

そういう花を持たせておくとか何かのときにものを頼みやすくなる、そういうことは人間関係と同じく国際社会でもあるので、花を持たせることというのは大変大きな力になるとはいえませんが、ちょっとした力にはなって、そういうことがいろいろな駆け引きとか、やり取りのときに重要なことはよくあります。

(鷺田) 前半の議論で皆さんのお話を聞いていて思ったのは、世の中というのはこれまでも閉塞しかけたときには別の原理を入れるとか、あるいは世の中の原則の中でへこんでしまっている人に花を持たせたり、何かの形でもう一回元気にする装置のようなもの、いろいろなそういう知恵が、外交、政治レベルから日常生活、家族関係にまで働いていたと思うのです。

今回は人間力や元気をテーマにということで、今は河合文化庁長官の考え出された元気という言葉に関西のキーワードにしよう、あるいはモットーにしようということがありますし、あるいはもう少し文科省寄りに言うと心を育む、心の教育などということもあります。例えば元気という原則では、へこんで元気が出ない人、あるいは元気をもちそこねた人ですがたがたと崩れていく人も必ずいるわけで、その時にそういう人たちも別の形で、今日の議論ではこの現場なら俺の場所がある、あるいは自分が発揮できるというような場所を絶えず柔軟にきちんといつも設けておく。硬直的にこちらが勝ち組、こちらが負け組というような形でなくする装置が、文化の中にはこれまで沢山あったように思うのですが、この頃はそれがどこで生きているのだろうかという感じがします。

学校という場所や、家族という場所、会社という場所以外の社会組織、つまり、いわゆるボランティアといわれるところでは、ある意味でそれをうまく活かしていこうという心配りがお互いの間にあるような感じがするのです。もちろん角野さんがおっしゃったように、そういうボランティア的な団体の中でも、期待に押しつぶされる人や、それを負担に思ってしんどくなる人も出てくるのですが、その辺りから僕らは社会の中で、あるいは文化の中で、どんな仕掛けをなくしたのか、あるいは再建しないといけないのか、あるいは新たに構想しないといけないのかを考えないといけない。少し硬い言い方ですが、元気になる仕掛けについて、またそれぞれのお立場での事例などを教えていただきながら、後半進めていきたいと思います。

## ②価値観の多様化

(河内) 世の中の不公平を正したいとか、明らかに理不尽な差別はおかしいと思うわけですが、私は中学のときにこう考えたのです。人間が作り出した嫌らしい差別というのは、家柄、身分、学歴、財産、地位など、7つくらいある。人為的に作り出した、制度的に作り出した差別です。これが全部ない社会を考えたら、美醜と力の強さ弱さだけになってしまうのではないかと、愕然としたわけです。要するに、強い男と美しい女ばかりが得をするのではないかと思いました。これが一番絶望的な社会で、サムソンとデリラのような人物、英雄と美女が出てくる神話のようなものではないかと思います。ところが、神話も大国主命(おおくにぬしのみこと)のように力は弱いけれども機転の利く人や、天宇受売命(あめのうずめのみこと)のように美人ではないけれども面白いパフォーマンスをやるというものが少しずつ出てくるわけです。

要するに、神話的な世界は間違いなく美しさや強さで決まっていることは否定できない事実です。ここからいかに価値観を増やしていくかというのが人間の文明なので、逆に考えると、例えば昔、私の周りでも器量があまりよくない女性で、持参金があったお陰で結婚でき、それでそこそこ幸せな人生を送った人がけっこういるわけです。そういう人に対して人生は金ではないとは絶対に言えない。

私の考えでは、美醜、腕力を含めても8~9つぐらいの価値観で大体世の中は決まっています、そのうちの4つも5つも持っている者と全然持っていない者とに分かれる。はっきり言うと、価値観の数が少なすぎるというのが私の結論なのです。100~200もあったほうがいいのだということです。この前北の湖親方と食事をしたのですが、学校の成績はあまりよくなかったそうです。でも、大横綱、理事長になったら、品もあるし、知的な感じもします。彼にはやはり相撲というものがあつたからよかつたわけです。

結局、革命で価値観をすべて変えようとしても、また揺り戻しが来るのです。だから、イギリスのように古いものを残しながら価値観を増やしていくことしか手はない。そういう国が女性の参政権も一番早かつたわけです。全部引っ繰り返したら、その後に来る反動が大きいのです。

アジアでも例えばタイのような国は、王様、僧侶、軍人、華僑、日本人等、威張る階層が多い。多様性がある。だから、少なくとも国民が二分して虐殺するようなことが起こっていないのです。

そのように考えたら、日本はまずまず歴史的にはうまくやってきている方だと思うのです。かといって、現在の日本のようにお笑いばかりというのも、少し多様化が行き過ぎてテレビに汚いものがあまり出すぎるのも嫌だけれども、しかし、少なくとも日本は多様化しているわけです。私がこんなことを言うと、私は価値観ではなく事実を言っているのです。ほとんどの人ははっきり反論できないのです。

だから、美醜と体力の差だけで決まる社会があまりに残酷だということで、みんな苦労して価値観による優劣をいっぱい作ってきたのが人間の知恵だと思うのです。文化というのは、いじましくもいじらしい、少しでも威張れる種類を増やしてきたという、その進化の歴史だというのが私の結論です。日本はそういう社会をもっと進めていったら面白いのではないかと思います。

(鷺田) 先ほど紹介した童門さんがよく似たことを言っておられます。最近、普通は何やらしさなどはいけないと言われるが、企業ではこの会社ならと言ってもらえること、人間ではこの人ならと言われることが大事なのだと言われていました。普通「うちの会社」と言うと、会社の家族主義のようにこれまで悪く言われていたけれども、うちの社長、うちの製品、うちのサービスということで認められるということは実は大変高邁なことで、これはアメリカの会社は株主のためにあるというのとは違う発想だということを書いていらっしゃいます。

(河内) 究極に言えば、1億の価値観による優劣を持っていたらそれが最高の形なのです。

(武田) 童門先生の議論では、そこを差異という言い方をされていて、それぞれの持っている差異をどう際立たせていくか、磨いていくか、その重要性を非常に強調しておられました。

(角野) それぞれが持っている差異、個性というのは、当然それぞれの人が持っているわけですが、今の議論の大前提としては、個人個人というのは変わりえないものであり、本質的に持っている魅力とか、その個々人が本質的に持っている固有の人間力があって、あとはそれが評価される体系、評価されるシステムを社会で複数用意しておきましょうということだと思います。

つまり、個人が固有に持っている人間力をパワーアップする、あるいは別の人間力を身につけることによってある社会に同化していく、社会の中にあるポジションを持つということは、あまりしんどいから考えないほうが良いと聞こえたのですが、そうなのでしょうか。つまり、先ほどのお話は、スキルアップをしようとしてもしよせん知れている。それよりも、それぞれが固有に持っている差異を最も認めてくれるような体系、システムが、音楽、絵画、お笑いなどのそれぞれの文化としてたくさんあるという状態を社会の方がむしろ用意すべきである。個人が変わるのではなくて、社会が用意すべきであると理解したらいいのでしょうか。

### ③多様化の危険性

(鷺田) あえて少し楯突くと、日本に1億の価値観による優劣があれば、それが最高だと河内さんは言われたわけです。それは今よく言う多様化、すなわちそれぞれの固有の存在をそれぞれ尊重し合って、差異を差異として認めましょうという多様化の論理だと思うのですが、あの多様化というのはちょっと危いところがあって、多様ということが一種のアパルトヘイトになる可能性がある。あなたはあなたで、こちらはこちらで完結していて、それぞれはそれぞれの場所にとということで、ある意味で本当の意味の交通、今の自分を出して、全然違うものと、もっとドロドロの関係に入っていくということをむしろ上品に鎮める理論のように機能する場合もあるのではないかと思います。例えば国とか民族でいえば、それぞれお互いの差異という中で例えば文明の衝突などが出てくるわけです。例えばイランとアメリカとの関係などでも、差異を尊重することで済まなくなっています。

(中西) 差異とは少し違うかもしれないです。文明の衝突というのは差異で、文化的価値観が違うというところから生じるというのは確かにそうだと思うのですが、今お話は、差異とは少し違う感じがします。何かある種の基準で優れている人とそうではない人を分けると、優れている方がよいのだという感覚です。それは多分、他人から尊敬されたときの優越感のようなものが人に満足心を持たせる、あるいは責任感を持たせるということで、ただ単にある人と別の人を違う基準で見たときに、それぞれいいところがあるという多様化や差異という議論とは違う気がするのです。少し僕には難しすぎて、そのことと差異による価値の衝突などがどう違うのか、うまく説明はできないのですけれども、直感的に違う気がします。

そして、何かしら人間には他人から尊敬の眼差しで見られたいという願望があって、自分は何かの点で他人よりも優れているのだ、あるいはある面で自分よりも劣った人間がいるのだと思っていないと精神のバランスが保てないところがあるというお話は、何となくわかる気がします。そういうものを取っ払ってしまえということが、かえって巨大な専制、不安定、ストレスを生み出すというのは、感覚としては非常によくわかる気がします。

#### ④多様な現場の重要性

(有栖川) 私は河内さんの考え方は非常に面白いと思って賛同します。

角野先生がおっしゃった、各人の能力というのはスキルアップしないものなのか、それが前提なのかということですが、私は個人の能力はそれほど向上しないと思っています。それはもちろん、俺は人前でしゃべるのは苦手と思っていたけれども劇団に入ってみたらセンスがあったなど、気がつかないものが発揮されることはあるでしょうけれども、基本的にそれほど変わることができるものではない。私が前半の発言で、それぞれふさわしい現場で自分は一人前だと思えることが人間力を発揮することで、そういう現場と人が合うということが社会全体の人間力の向上になるのだろうということを言いましたが、河内さんのおっしゃることと私が言っていることは、ほぼ同じだと思うのです。

それぞれに1億の花を用意するかというと、別に私は花などなくてもいいと思っているのです。花を持たせるというのは日常で少し褒めてあげるとか、自分に損にならない程度でちょっとお世辞を言うことで十分花を持たせてもらえると思うし、大層なことではない。花というほどのことでもないと思うのです。みんなヒーローになりたいわけではないと思うのです。この世界で自分が一番大きい花束を持っている。それは1億種類の花があって、いちばん大きな花束を私は持っている、そこまで皆行きたいとは思わなくて、とりあえず一人前にやっている自分と自分で自分を認められて、他人からも一人前にやっていると思えられたら、人間というのはそれで私は幸せだと思うのです。

少し話が飛ぶようですが、私はペーパードライバーで自動車の運転ができないのですが、もし自動車の運転をやってみようと思立って、少し練習し直して、車を買って、車の運転ができたなら幸せだと思うのです。自動車の運転ができるなど、そんなものは何の自慢にもならないけれども、ドライバーとして自分は一人前に車を運転できるようになったと認められたらうれしいし、スキーでボーゲンができたらうれしい。そんな人類史上何の価値もないことなのにうれしいことがあるわけで、大きな花束が欲しいわけではなく、ヒーロ

一になりたいわけでもなく、称賛が欲しいわけでもない。生きてると自分で認められるし、人からもそう見られるということだけで十分幸せだと思いますから、そんなに大きな花束でなくてもいい。

とにかく現場がいっぱいあればそれでいい。どこかにその人にふさわしい現場があって、そこでトップになるためには現場が1億2,000万要るのかということではなくて、ある程度の数の現場があって、そこに行けば自分は一人前だと思われればよいと思います。隣の現場に行けば半人前で、肉体労働の現場に行けば自分は使いものにならないけれども、計算をする数的処理能力に関しては一人前といわれる。でも、手紙を書けといわれたら手紙を書くのは苦手とか、それはかまわないからいくつかカメラが切り替えられて、どこかのアングルから写されたら「彼（彼女）はちゃんとしているね」といわれたらそれで十分なのであって、僕は人間力というのはその程度のことなのではないかと思うのです。

（角野） 先ほどの居場所という話ですが、その中でトップになれなくても同質なり何なり、少なくとも自分の気持ちが理解され、通じる場所がどれだけ世の中に用意されているかということだと思うのです。ただ、今は常に若い人たちが自分探しや、居場所探しということ、強迫されているような感じがあるのです。そんなに別に強迫されなくても、居場所というのはいずれ見つかるという話でいいのか、それともやはり自ら探すということが必要なのでしょうか。

#### ⑤コミュニケーションと居場所

（大谷） うちにはそういう人たちがいっぱい来ます。アートNPOというのは、もちろんアーティストもいますけれども、アーティストといろいろな人を結びつけていく組織ですから、本当に十全に普通の社会生活がしにくい人と出会うことも多くあります。だから、例えば引きこもりの子やニートの子が来る。あるいは、ダンスをやる人なんていう人は3分の1はいわゆる「普通」ではない。だから、なかなかうまくアルバイトなど普通の社会生活をしながら自分の表現をやるなどということができない人が結構いるのです。それは多分彼らにとっては現場を作っていることになっているのだろうと思います。

若い人だけではなくて、少しベタな話に戻しますが、「ビッグ盆！」というイベントを8月初旬を中心にやる予定をしています。これは地域の人と僕らが、フェスティバルゲートというところで劇場をやったり、現代音楽のライブハウスをやったり、あるいは「声と言葉と心の部屋」という言葉を通じたコミュニケーションをやったり、あるいは映像を軸にしたコミュニケーションアートということを中心としているNPOが、今までも地域とかかわってはきたのですけれども、さらにその4つのNPOが協力してその地域とかかわろうというものです。

何をやるかということ、僕らがやっているアートというのは、先のとんがっているアートで、社会的な評価がまだそれほどされていない、先駆的なアートなのです。ただ、逆に面白いのは、世界のコンテンポラリーアートのコミュニティの中では非常に有名なアーティストがいたり、組織としても有名なのですが、地域の人にはなかなかそういうことはわからないわけです。その中で、僕らとして、先ほど角野さんがおっしゃった現場をどう作っていくのかということの中で「ビッグ盆！」というタイトルをつけたのは、盆踊りという

1つの言葉が非常にわかりやすい、伝わりやすい言葉であるためです。それで、その地域にまず「盆踊りを復活したいのです」という話をしに行きました。その町会長は「もう42年ぐらいやってないで。それは昔、釜が崎で暴動があって止めになって、人が集まることを警察が禁じたことから中止になっている」ということでした。だから、彼らの中にはそこで盆踊りを復活するというような発想すらなかったのです。

そこで、まず僕らが復活させようということと、新しい盆踊りを作ろうという2つの視点から、老人いこいの家というその地域の老人が集まる場所におばあさんやおじいさんに集まってもらって、昔の盆踊りを覚えていますかという聞き取り調査から始めたのです。1つはおばあさんが持っている、昔のことを知っている能力があって、それはふだんはほとんど活かされていない。そういう話をする場所もなく、相手もいないところに若いアーティストが来て、昔の盆踊りの様子を聞きにいった。「ここ独自の盆踊りというのはあったのですか」と聞くと、「南陽新地踊りがあったような気がする。私はお茶屋の娘で」等延々と話をされるのです。そのこと自体でもうすでにそこにそのおばあちゃんの居場所が新しく生まれてきており、僕らとすれば、そういうことを聞くことで逆に僕らがあそこでそういう事業をやっているという力に反映されてくる。

次は音源探しのため、いろいろなところを探したのですが、なかなか見つからない。ようやく地元のジャズバーのマスターがSPを持っていて、音源が出てきたのです。それを今度はCDに落として、一昨日またおばあちゃんに集まってもらって、昔の芸者さんにも来てもらって、それを思い出すかと思ったのですが、その曲と違うと言うのです。通天閣が今年で50周年なのですが、「この曲はたしか通天閣ができたときに記念で作ったけども踊るところまではいけへんかった曲や。実は福知山音頭を踊ってた」という話が出てくるのです。

そういうコミュニケーションがあって、それが1つの「ビッグ盆！」というイベントにつながっていく。まずコミュニケーションできることによって、おばあちゃんの1つの新しい今の居場所が出てくるということがあります。同時に今、新しい盆踊りを作ろうと思っていて、その地域の小学校に行ってまず言葉をたくさん出してもらって、子供たちから出た言葉で歌詞を作ったのです。これは2曲作って、音楽系のNPOの作曲家が曲をつけて、DANCE BOXのうちのコレオグラファーが振り付けをつけたのです。例えばこの盆踊りが10年経ち、10歳の子供たちが20歳になった時にもしこの盆踊りが継続していれば、自分たちが作った踊りがそこに残っているということになります。今、小学生としての居場所が10年後に帰ってくる居場所になる、何かヒントがある。

現場を増やすという中でいちばん大事なことは、いかにアーティストなどという立場にいる人間がコミュニケーションを生み出していくかです。コミュニケーションを生み出すことで、先ほどのワークショップの話ではないですけども、ふだん自分の居場所をうまく見つけることができない子供たち、おじいちゃんやおばあちゃんが、何か見つけることができる。それは与えているのではなくて、そういう関係性を作ることでこっちも与えられていくというインタラクティブな関係性になっていく。

特にコミュニティというもの、家というコミュニティ、学校というコミュニティ、地域というコミュニティ、すべてが崩壊し続けているような気がする中で、従来の価値観ではない価値観をどう入れ込んでいくと、河内さんがおっしゃるように多様な価値観というも

のになるのか。そういうものが成立していくための基盤、コミュニティがないと、崩壊してしまうだろうと思います。

それから、河内さんがおっしゃったように、では、そういうコミュニティを保障していくときに、評価していくシステムをどう作っていったらいいのかというのがもう1つの大きな問題かと僕は思っています。

(鷺田) 今の話にあるフェスティバルゲートは大変象徴的な場所で、最初に商業施設として建て、うまくいかなかったときに行政がサポートに入ってそれを引き受けて、それがまたストップする。もうそれで終わるのかというと、行政のサポートがある間にその施設が今度は周りの商店街にあふれ出して行ってそちらのネットワークを作り、それから廃墟のようになっているがゆえに日本橋の方からアニメ風のもものが流れ込んできたりと、今度は商業施設でもなく、企業でもなく、行政でもない、次のムーブメントであり、ある意味また別の意味での支えが出来始めているという段階というのは、このフェスティバルゲートだけの問題ではなく、今の企業活動全体を見ても非常に大きい意味があるし、シンボリックなところかと思えます。

(大谷) そうですね。これは去年の5月に移転する、あるいは閉鎖するというのも両方考えてほしいというので、鷺田先生にも1回来ていただいて4回シンポジウムをやり、例えば創造都市という概念からどう見ていけばいいかということなどをやってきました。その中で、私たちはもちろんあの場所を全部アートセンターにするのが理想なのですが、そうもいかないだろう、でも、ビジネスだけの施設として失敗したわけですから、これを市民参加型モールとしてアートとビジネスとコミュニティとパブリックという要素を入れたらどうかということ、**「新世界ヒルズ」**という名前をつけて私たちがシミュレーションしたのです。

しかし、それだけだと結局その話だけになってしまうので、何かプロジェクトをしようとしたときに、地域の人、ここでは新世界の人と日本橋の人ですが、今まで日本橋と新世界というのは全く共同事業をやったことがなく、背中を向いているわけです。日本橋の人たちの意識は心斎橋、難波を向いていて、新世界の人たちは天王寺界限という意識があって、一緒に共同プロジェクトなど絶対にできない。「昔からようせんねん」という時に、逆に「あんたらやったらそれをつないでいくことができるはずや」という話が、商店街側からあったのです。

そういうことも含めて今回は日本橋と新世界とで進めてきました。点としてのフェスティバルゲートを少しずつ面にしていくという作業を、このような作業を通じてやっていきたいと思っているのです。

## ⑥人間力回復の取り組みと官民の役割

(本間) 分野が違う皆さんのお話を、目からウロコが落ちるような感じで伺っていたのですが、人間力という言葉を使い出したのは、ミクロのレベルというよりむしろマクロのレベルで、日本全体が90年代に閉塞観を持って、失われた10年などという言い方がされる一方で、中国やインドが元気よくなってきた。その中で我々がこれまでと同じようなプレ

ゼンス、役回りが果たせるのでしょうかという問題意識が小泉内閣が発足したときにあって、日本人全体が自信喪失的な部分もあり、これから21世紀型の社会を作っていくときにどうしたらいいのでしょうかというところからスタートしたのです。

人間力という言葉は、実は我々の諮問会議でも使っていて、今まで我々の科学技術は他の国に比べて差別化でき、差異化できてきて、それで経済力が非常に高かったが、今は落ち込んでいるのではないか。それを拡大的な形で、日本が自信を持てるような新たな差別化、差異化ということをしなないと地盤が沈下していくのではないのかという流れの中で、フロンティアからある種日常的な世界まで、日本の人間をもう一度考え直して全体をレベルアップしましょうという発想があったのです。

そのため、フロンティアのところでは最初は、東大の総長をやっている小宮山さんに、科学技術の分野でどういう具合に世界をリードするのか、そのために科学技術の予算をどうするのかというようなところで、イノベート・ジャパンという形で東大に予算をつけて調べるなどということまでやったわけです。

ところが、いろいろ考えると、フロンティアのところだけではなくて、平均的なところで我々は強いと言ってきた部分、例えば日本型の企業システムで、長期雇用でずっとやってきた現場の力などがあるわけです。ところが、これも少し揺らいでいるのではないか。これをどういう具合に再生するか、突出した人よりも普通の人の世界の中でどう考えるのかということも、もう少し、意識も含めて能力を考え直していこうではないかということになりました。さらに若い人の段階では、勤労意欲自身が、我々が最も誇れてきていた部分が壊れているのではないか。ニートや、フリーターが増加する流れの中で、どんどん人口的に若年層の労働力比率が下がっている。そういうところを再構成していくことも必要ではないのでしょうか。こういう全体の競争力、力をどう持っていくのでしょうかという部分があったわけです。

その上でグローバル化をして科学技術、専門知識が急速に変わっているのに、我々自身が意識も含めて変化に対応できない部分を、プロフェッショナルとして一体どういう具合に再構成するのですかという部分が問われている。都市計画の中でもそうですし、弁護士もそうですが、いわゆる今まで先生といわれていたような人々のアビリティも壊れているのではないのでしょうか。

そういうマクロ的な視点の中で、先ほどからお話を伺っていて私は非常に感銘を受けたのですが、一体我々は個のレベルのところをそれをどういう具合に受け止めて、それを個の人々の能力の向上という形につなげて、社会全体のコーディネーションシステムをどのように作り上げていくのか。おそらく、環境とそれを構成する人間社会のインタラクティブな変化が、時代の節目、節目の中で大きく起こるのだらうと思いますが、我々にはまだその全体像が見えていないのかと思います。人間の幸せと日本の経済力の向上と社会、世界の中における我々のコントリビューションのありようについて、全体像を描き切っていない。それをどういう具合に、それぞれの立場の中で再構成していくかということになるのではないかと。

大谷さんのお話にあったNPOの役回りなどは、おそらくコーディネーションシステムの中でこれまでは官がやって、プロフィットは民がやって、そこで埋め切れない部分で一体どういう具合にこれを自己実現と結びつけながらやっていくのでしょうかという話にも

つながるのだらうと思うのです。私は本当にそういう意味で、幅広くこういう検討をしていただきながら、全体の流れをどういう具合にメッセージとして強く発信していくかということ、この懇談会をぜひ活用させていただきながら、まとめ上げていくということも非常に重要ではないかと思っています。

有栖川さんがおっしゃったとおり、人間の個の能力をどういう具合に考えるか。経済学的な言い方で申し訳ないのですが、経済学というのは割と競争という言葉で人との関係を強調するのですが、実は自分の能力を高めていって最大化をして、その物質的、精神的な満足を予定調和の中で最大限にしていくか。アダム・スミスは、「みんなが最善を尽くした帰結というのは、1つの価値観の流れの中でベターオフ（順境）になるような状況を作り上げていけるのだ。しかし、変わらない部分、親から引き継いだ資産や肉体的な条件というものを救済できるような市場システムはない。そのコーディネーションをどういう具合に、社会的、政治的に、初期値の変化も含めて取っていくのかは、公の役回りとして存在する」という整理のしかたになっているわけです。その点で、公と民とのかかわり方、官と民とのあり方についても、相当混沌とした今の時代の変化の流れの中で、その全体像がそれぞれ満足できるような状況には達していない、過渡期なのだらうと私は思います。

河内さんがおっしゃったように、多様な価値観があると個人の能力が極限的にうまくいく、そういう側面もあるし、そういう競争的なメカニズムによって自分の中でモチベーションを高めていくということは非常に重要だとは思いますが、そこを生に言ってしまうと勝ち組、負け組という、ギラギラした社会になってしまう。それを社会の中で調和させながら、全体をうまくプラスの方向にもっていき、かつ個人が満足のいく方向性でコーディネーションしていくシステムが、私にはまだ描き切れていないし、日本全体でもそこは議論の余地があるところだと思います。

（鷲田） 本当に身に着けなければならないものという意味では、皆さんに発言いただいたと思うのですが、ここでもう1回一通り皆さんの意見をお聞きしたいと思います。

#### ⑦職人的価値観と政治家的価値観

（河内） 「悪」という文字は、巫型（あがた）、すなわち昔の中国の大きな建物の下に敷く土台の形を積み上げたもので、その下に心がついたものです。上の巨大な建物の下積みさせられている抑圧された怒りの心、恨みの心、それが悪なのです。

抑圧されている側から感じるエネルギーというのは基本です。歌舞伎でもよく悪太郎というのが出てきますが、あれは悪いという意味だけではなくて、エネルギーを表現するもので、悪という言葉があるのです。だから、差別されるという感覚をはね除けたいという、これがいちばんわかりやすい動機です。自分も威張りたいという動機は否定できないと思うのです。だから、私が先ほど言ったように、勝ち組の種類をたくさん作りたいたいと思っているわけです。

ただ、人間には2種類あると思うのです。最近、歌舞伎座などで大道具、小道具に応募する若い子が増えているのです。職人的なことは10年頑張ったら一人前になるという道筋が見えている。いわゆるディシプリン（訓練）でものになる子と、我々の業界のようにディシプリンの代わりにモチベーションで、すなわち何とかしたいと躍起になって、いろい

ろなことをやっているうちに自分たちのものができてきて何とか食えるようになる子と、2種類あります。

職人的な物を相手にするタイプでは、物というのはなかなか言うことを聞いてくれないけれども、本当にこちらが技術を持てば物は応えてくれる、そこに職人的な1つの喜びがあります。ところが、政治とかプロデュースという仕事は、こちらが何かしてあげても向こうは全然乗ってきてくれないし、逆に、こちらより向こうが気に入ってくれているということがある。むしろそのダイナミズムが好きだというタイプ、私もそうなのですが、裏切り、裏切られる、そういうことが面白いと思って見ているタイプ、その2種類に分かれます。

(鷺田) 河内さんの業界というのは政治とプロデュースですか。

(河内) 政治家などの考えにかなり近いと思います。人間を相手にしているから。予測できないことが面白い。うちの業界の連中には、私はいつも「私はあの人は嘘をつかないから好きだ、あの人は嘘つきで嫌いだと、そういう価値観を持っているやつは来るな」と言っているのです。要するに、裏切られたくないと言っているだけのことでないか。プロデュースというのは「あいつにはよくだまされるけれども、あいつは面白い」と思うぐらいの者でなければできない仕事なのです。

職人的な価値観の人は、ちょっとそれに耐えられないと思うのです。だから、2種類あるのではないかなと思うのです。

(本間) まさに人間力を高めるといえるのは、多様な能力を社会の中でどのぐらい生かし切るかということだと思うのです。日本の場合には高度成長期から長期雇用で、企業の中で一生同じような生活をしながらプロモーションされていく、それがメジャーなライフスタイル、あるいはワーキングスタイルとして定着してきた。ところが、グローバル化して、大きく経済環境が変わっていったときに、それでは太刀打ちできないような能力を求められる経済社会になってきているわけです。ホリエモンや村上ファンドのような、金の世界でいえばそういう話になるわけですが、それ以外のところでもITを使いこなせる人とそうでない人がいる。では、その次に感性で生きていく人たちをどう作るか。あるいはマニャックな形で職人として生きるというような、高度成長期の中で失われていった社会の多様性という部分をどのように復元するか。

ところが、その価値観をモノトーンで全部仕切ろうという部分がやはり強すぎて、社会が多様性を大らかに受け入れる余地が、日本の場合には少なくなっている。それがダイナミズムを小さくしてしまっているのではないかという思いがあるのです。そのため、日常的な形で人間力を高めていくために、やり直しが利くというものを作っていこうという動きがあり、あるいは人それぞれだという小泉総理が国民感情に反するような言い方をしているのは、そういうことにつながっている部分があるわけです。多様性や連帯感、これまでの価値観との齟齬の部分がある種混乱を招いている。日銀の福井総裁や、最近のオリックスの宮内さんに対するバッシングなどでも、本当にこういう具合になっている部分があるわけです。河内さんが言うておられることが受け入れられるかどうかは、まだ私に

は自信がありません。

(河内) 先ほど、職人的なモラルと政治家のモラルを対比しましたが、実のモラルと虚のモラルがあると思うのです。いまだに実業モラルだけで虚業家を批判されているけれども、虚業家のモラルというのもあるのです。変なことを言って人をだましても認められる人間というのがいるわけです。その議論をしていない。だから、日本はバブルがはじけたら急に清貧の美学が出てくる。貧しさに耐える美学はあっても、豊かさに耐える美学を論じない。

(鷲田) そうそう、極端なのです。

(河内) だから、貧しいときは耐えるしかないというのは当たり前の話で、豊かな国だといって豊かさに浮かれるのではなくて、豊かさに耐える哲学のようなものを出しておくべきだったし、どこかで後ろめたいと思っているから、バブルがはじけたらまた清貧に戻れというばかりなのです。

変な表現ですが、プロデュース能力というものはつきりとみんなで議論してほしいのです。いいものを作る、きちっと売るというモラルは日本には十分あるので、人をプロデュースする、みんなも活かすというということが、どんなに面白い仕事かということを議論したほうが良いと思います。

### ⑧競争による目の輝き

(孔) 先ほどの本間先生や皆さんの議論を聞きながら考えてみると、人間力というのは目の輝きなのです。テレビで昔「アジアマンスリー」を担当していたときに、アジアの等身大のいろいろなレポートを紹介したことがあったのです。その中でよくコメントとして、あるいは感想として言われていたのは、発展途上国で一見してすごく貧しい所の子供ほど目が輝いているということでした。

それは小さい目標を1つ自分で見つけて、そこで1つの幸せを見つけて、それでも幸せと思って目が輝き始めるのです。そういった意味合いで、日本の中では逆に輝いている目が少ない。本間先生が先ほどいろいろ分析された中では、特に若い子供などの中に競争という気持ちがありませんので、目標もないし、本当の心からの輝きの目が少ない状態になっているということでした。その意味合いで競争をさせる必要はあるかもしれない。そういった中で自分の目標を見つけて、1つ小さい幸せを見つければ、目が輝き始めるかもしれない。

しかし、日本では競争させて、勝ち組、負け組に分かれ、負け組ではどうかということになります。私は日本に来て20年ぐらいになりますが、競争がありません、全部基準が負け組に合わされて、特に教育は低い水準に持っていかれており、それはどうかと思っているのですけれども、もう一度競争させたとしたら、例えば落ちこぼれていく負け組をどうすればいいか。それはそれなりに社会として、先ほどの先生方のお話の中にあつたように、差異という部分を認めるスキルをたくさん作る。例えば負けても、あるいはある部分で競争して自分が勝てなくても、人間は生まれた以上、存在意義を持っているのです。

別の取材で感じたことは、日本では輝いている目が普段取材している中でも少ないのです。しかし、私として大変印象に残っている、日本で見た、輝いている目があるのです。今はインバウンド、すなわち海外から日本への観光客を増やすため、ビジット・ジャパンキャンペーンにのって、いろいろな自治体でプロモーションビデオを作っており、堺市でもプロモーションビデオを作ることになって、とにかく持っている産業、あるいはスポットを全て見て、それぞれの感想を語った上でプロモーションビデオを作っていこうということになって、堺市の今まで行ったことのない色々な所に、1日ばかりで行きました。

堺市の産業の1つに刃物があり、その工場にも行ったのですが、本当に小さくて身動きもできない位の所で、親子2人でやっているのです。そこでいろいろ話を聞いたのですが、そのときに私は輝いている目を見ました。お父さんの方が、「私の包丁は世界一だ。例えば同じ刺身でも私の包丁で切れば刺身自体が光ってくる。私がこのような汚らしい格好でも梅田に出て、リッツカールトンホテルに行ったら、ただでコーヒーを出してくれるよ」という一言のときに目が輝いているわけです。それはまさにその人が差異を持って、そこで自分の差異を極めた中で認められているのです。別にその方が勝ち組、負け組という分け方をされるわけではないのですけれども、差異が活かされる場、あるいはそれを極める場があると、その人の目自体が輝き始めるのです。

いろいろ聞いている中で、自分の仕事の中で、あるいは考えている中で、触れている部分で思い出しながら話しているのですが、この人間力、輝く目、目標を見いだしていくという場がある社会の中では目がみんな輝き始めるのではないかと思います。あまりにも競争が少なく、目標もわからない、自分の差異はどこにあるかわからない、認めるものもないという中では、目が死んでいっているということです。社会全体がそうなってきているというような状態ではないかと思っています。テレビの話で、その取材や、仕事を通じて感じていることです。

(鷺田) こうは考えられないですか。競争がないというよりも、この社会は競争が早く終わりすぎるのではないか。つまり、幼稚園ぐらいの時から競争の波に入れられて、10代の前半で私はここではもう芽が出ないとか、もう終わったとかと思い、大学に入る子も大学に入ったら終わったということで、大体18歳から気分的に余生に入る。今のお話を伺って、早すぎる競争という面もあるのかと思ったのですが、どうでしょう。

(有栖川) お話を聞いていると、我々の社会が実態よりも過剰に悪く語られているような気がしてきます。競争が早く終わりすぎるかどうかというのもどうでしょうか。一流の名門の小学校へ入って、中学校とエスカレーターで上がっていかうとして、幼稚園の段階で競争に負けたとえば、それはそこでその競争は終わりでしょうけれども、競争というのは日本は上にもっとあると思うし、私は日本人が暗い目をしているなんて全く思わない。ロシアのテレビなどを見たら大体笑って歩いている人はいませんよ。梅田でも、難波でも見たら、空疎な笑いかもしれませんが、皆ニコニコしながら歩いている。

(鷺田) ロシアとは全然違いますね。

### ⑨現在の日本は目の輝きのない社会か

(有栖川) 外国のテレビの番組を見ると、なぜあれほど不機嫌そうに歩いているのだろうと思います。日本人はけっこう満たされていると思うのです。逆にぜいたくを言いすぎです。そのような中で不満を感じ出したら、かなり深刻な不満の持ち方になると思うのです。今は負け組といっても、諸外国に比べると生活水準は非常に高いです。その中で負けたなどと言っている。そういう傾向が表れたから少し警戒しないといけない、問題意識を持ったほうがいいというのはあるでしょうけれども、やや騒ぎすぎ、やや悲観的にものを見すぎているという感じがします。

今は昭和30年代を懐かしむ映画がはやり、あの頃は皆貧しかったけれども目が輝いていたと言っていますが、嘘です。あのころはもっと貧乏人はいじめられていたし、セクハラは我慢して当然のものだったのです。昔の社会の方がよくない、今の方がよくなったことが多くあるのです。

ただ、1つ気になるのは、負けても別にかまわないところで負けているのに、例えば月収が少ないのは大したことはない、そのような人は大勢いるのに、うちは月収が少ないからと悲観的になる。負けているのだからかわいそうなどと大きなお世話だと、負けながら言ってもいいと思うのです。

私も裕福とは反対の、普通位の家に育っていますが、昔は貧しい人の方がフェアだった。うちはお金はないけれども人様に後ろ指を指されるようなことはしていない。子供が少しでもずるをしたら返してこいという。「うちはお金はないけど、そんなことはせえへんのや」という矜持、プライドを持っているというイメージが、昔の日本人にはありました。それでいいと思うのですが、今は負けると地獄のように言われる。それもおかしいと思うのです。勝ったも負けたも見方によればいろいろあるわけであり、裕福かもしれないけれども家族の中で団欒が取れているかといったこともあるし、勝った負けたというのは一元的に言えないことなのです。

たとえいわゆる負け組であろうとも、それが致命的なことであるというような感じで言われ、今の日本の社会には希望がないような語られ方をしますが、競争があるのかないのか、最近をよくわかりません。競争社会だからいけない、受験地獄だといわれて、競争がなくなったらないで競争がないから目が死んでいるといわれたら、どうすればいいのだということになる。

(本間) 孔さんがおっしゃったのはそういう側面ばかりではないと思うのです。鷺田先生がおっしゃった通り、日本の場合には、私の学齢期は、父親が戦争に行き帰ってこなくて、大変優秀で能力のある連中が中卒で集団就職で行ったという世界でした。それぞれの中で一生懸命戦後の荒廃期を乗り越えていこうとした時代は、孔さんがおっしゃる通り、みんな生き生きしていました。

(有栖川) それは幸福なのでしょうか。逆に市民の目が生き生きしている時代というのは、どういう時代なのでしょう。

(本間) それは生きていかなければならないという意味、あるいは何をしなければいけ

ないかということに対する生き生きとした目だと思います。食っていくということが最も重要な要素になりますから。

(有栖川) それは結構悲しげです。

(本間) そういうような側面と今のようなニートのような形で、家庭力がまだあって、何もしなくても食べていけるような状況があって、それがあまり生き生きとした目をしていないという状況を作り出しているという部分もあるわけです。

だから、どちらもいいとか悪いの問題ではなくて、環境の中で人間がどういう形で生きていくかというときに、今の時代状況の中でニートやフリーターになった時に、一体どういう具合に問題を克服するかというのは、社会の問題としてとらえなければいけない問題であるということです。わざわざ競争しろという形ではなくて、そういう人たちに対してどういう人間力を培っていくような状況を作っていくのでしょうかという、社会的な問題はあろうと思うのです。だから、我々はそういうことを今、議論しているわけですが、放っておいたらいいということなのかどうか。

(有栖川) そんなことは全く言っていません。

(本間) おっしゃっていないというのはわかります。しかし、それを比較してどういう具合に考えたらいいのでしょうか。昔と今を比較して、我々はどういう処方箋を得るのでしょうか。どちらでもいいということでしょうか。そこが私はよくわからないのです。

(有栖川) 今、お話を聞いていて、現状認識のレベルで随分違うのではないかという気がします。

### ⑩ 3段階の人間力のフェーズ

(角野) 私も人間力とは一体何かというのをもう1回考え直していたのですが、自分なりの理解では3段階ぐらいの人間力のフェーズがある。本来、人間が本質的に持っているべき生存力、それは肉体的にも精神的にも両方なのですが、それはそれぞれの人間の存在の本質にかかわる部分、非常にベーシックな部分としての人間力です。それは時代ごとに対応は違うが、何かあった時に自分で修復できる能力、自殺しない力という本質的な部分での人間力です。

それから、優劣というものの物差しがある世界の中で、言い換えると与えられたフィールド、与えられたシステムの中で向上していこう、あるいはトップを取ろうということにかかわる力が2つ目です。

3つ目は自分で居場所を探し出す力です。既存の枠組みかどうかは別として、自分で居場所を作ったり、あるいは見つけていこうという力です。これは自己実現、満足感につながる部分で、2つ目の部分は、本間先生がおっしゃった、諸外国に比べて日本の人間力は落ちているというものに近いところです。競争に勝っていく力です。

そのように分けられるのではないかと考えて聞いていたのですが、その上でさらに思っ

たのは、この与えられた枠組みの中で向上心を持っているという2つ目の人間力が発揮できる世界と、自分で居場所を作るという3つ目の人間力、満足感、充実感にかかわる世界を生き来する力というのでしょうか。頑張っている枠組みの中でやってみる、それは競争かもしれません。その競争の期間の長短はありますけれども、それである種の結論が見えかけてきたときに、今度はもう1つ自分の力を探してみようという、満足感や充実感にかかわる自分のフィールドを探していくしたたかさがあって、そこでまたトップを取っていくことができるかもしれない。先ほどの「刃物は世界じゅうで絶対わしには勝たれへん」というトップを取っていけるような力は自分で枠組み、ある価値体系を作ってしまうわけです。だから、実は2つ目と3つ目は案外表裏一体のものであって、むしろそれを自分で使いこなす、使い分けられる、または生き来できるような力というのも4つ目の力としてあるのかと思います。

では、その3つの力を社会はどのように育て、用意していくかという部分ですが、1つ目の力というのは最低限、国として用意しなければいけない。人間が人間として生きていけるようなベースのことです。2つ目の競争、経済の競争か、学力の競争かわかりませんが、そういう競争の枠組みというのは、国内だけではなくて、世界レベルの中である種の仕組みが作られなければいけないのかもしれない。3つ目は、それぞれが作ることができる。これは限りなく文化というものに近づいていくと思います。そういう枠組みをシステムとしてどう用意できるか。

そして、2つ目と3つ目を行ったり来たりできるような仕組み。これは例えばまさに文化をいかに経済の枠組みの中に持っていけるか。また、その逆ができるかというシステムづくりということを考え得るのかと思いました。

(鷺田) 時間もだいぶ迫ってきましたが、せっかくいろいろなお考えが出ているので、角野さんからスタートしたと考えて、一言ずつご自由にお願いします。

(川嶋) 先ほどから差別化という問題があって、私は子供の頃から別に特に何も取り得がなくて、美貌でもなかったから、けっこういじめられっ子だったのです。でも、今は有栖川さんが先ほどおっしゃったように、ニコニコ笑いながら道を歩けるぐらい結構幸せなのです。なぜ自分が幸せで、何を糧に生きているか、何をよりどころに生きているかというのは、説明できないのですが、なぜか幸せなのです。多分それは先ほどから皆さんが言っておられるような理由があると思うのです。

そういうことで考えると、例えば大阪の人もいろいろなことをいわれるのです。結構大阪の人も皆幸せと思っているけれども、語られるときは大阪の町はけなされることばかりでしょう。それでも、幸せなのです。大阪の人は、大阪はここがいいからだということを全然語るができない、それをどうやって見つけるのかというのがあるのです。

それから、少し話が飛躍しますが、テポドンについて北朝鮮の人は「日本はだれに向かって制裁と言っているのだ」と言っていました。しかし、あれだけ自分の国のことを強く言えるということは、それだけの自信があって、自分の国のことをいいと思っているわけで、それは中国でも、韓国でも、それぞれの国のここがいいということを多分わかっている、自分のアイデンティティ、自分のよりどころがはっきりわかっていると思うのです。

そういう意味では日本人がおとなしいのかわかりませんが、自分たちがもし1億の差異があるのだったら、ここが自分の差異なのですということを、それぞれがどうやって見つけ出すのかというところを、その辺をどうしたらいいのかと思って聞いていました。たまたまいい先生に巡り会えたり、例えば北の湖さんは成績はよくなかったけれども相撲取りになって才能を見つけられたからよかったです、それを見つけられなかったらただの人として終わってしまったわけです。

(中西) やはりいろいろなチャンスといったものが必要なのだろうという気はしました。昔がよかったかどうかわからないのですが、やはりもう少しいろいろな道があるという感覚だったのが価値が一元化して行って、特に勝ち組、負け組という時に、悪い言い方をするとお金が儲かるかどうかということで割と決めている。お金が儲かるかどうかというのは1つの価値観だと思うのですが、そればかりではない。

日本でアメリカの悪口を言うときに、アメリカというのはお金ですべてが決まる社会だと言うけれども、僕が見ている感じでは、そういう要素があることは間違いないですが、実際に生きている人は必ずしもそればかりではないと思うのです。それなのに、日本の場合に1つの価値観で測ってしまうことが社会の風潮として浸透していることに、機会があまりなくなっているという感じがあるような気がするのです。

もう1つは、価値の不寛容さ、あるいは極端が極端を生むということかと思いますが、特にメディアで出てくる言語というのは、今は非常に道徳主義です。先ほど福井総裁の例も出ていましたけれども、村上ファンドに投資していて大儲けしたから悪いと言われたら、貧乏人の私もそう思わないこともない。しかし、日銀総裁は偉いものだから多少金儲けしていてもいい。難しいことはいろいろありますが、そんなに重罪を犯したのかという気もするのです。

そういう類はたくさんあって、善悪二元論で、善がよくて悪が悪い、悪いことをしたら例えば職を辞すとか、そういうことでもない責任を全うしたことにならないという感覚が逆に活力を奪っていて、悪い言い方をすると事なかれ主義になってしまっているのです。昔はそこまでうるさくは言わなかった感じがするのです。なぜなのかはよくわからないのですが。

河内さんがおっしゃったように、価値を一元的な形で割り切ってしまうとすると、逆に望ましくない状態になってしまうということがあって、そのことに気づいているのだけれども、どのようにバランスを取ればいいのかという、その中庸、あるいはある程度の曖昧さを持てばいいのかわからなくなっていることが1つ問題なのかという気がしました。

(河内) 日本のことで考えると、海外に旅行すると、現場で働いている人のモラルが日本は高い。要するに、鉄道の輸送をはじめ、何でもまだまだきちんとしています。これが失われると日本の国力としては由々しきことだと思うので、その辺で、先ほど言ったように、職人的な世界に生きたいと思っている若い人が増えてきていることに期待しています。これは、必ずしも人を追い越すということで闘争心を燃やさないタイプで、ある種の自分の完璧主義のモラルを持っている。だから、現場のモラルの高さがなくなってしまうと、日本としては非常に力を落とすということを少し思いました。

(本間) 今まで語られなかった人間力という側面が1つあるように思います。ずっと議論がありましたように、それぞれどこかいいところがあって、その場をうまく見つけて、そこで自分の力を発揮していくという生き方が非常に大事だと思うし、そういう場をできるだけ広く作っていくということについても賛成なのですが、同時に、個人としての人間が持っているポテンシャルの大きさという面があると思うのです。

私はいつも転職する人に言うことは、どんなに望まない転職であっても、その行った先には好きなこと嫌いこと、いいところ悪いところがある。そして、必ず何かいいところがある、それを自分で見つけて、それを好きになれるかどうかは君の能力だということ。

つまり、自分探しとか、あるいは、自分にぴったりフィットした対象が与えられてくるのが一番いいわけですが、そうではなくて、自分自身がその環境の中で自分自身の能力をデベロップして発揮していく、そういうフレキシビリティというのが人間の中にはあると思うのです。そういう能力を強めていくというのも人間力の大きな面ではないかと思いません。

(有栖川) 私は今回の議論に臨むに当たって、人間力というのをどうすればより各自が発揮できるか、どうすれば社会の総和としてその力が増すかというような形で、いろいろな価値観があったほうがいいということで発言しました。昨今の日本で人間力が急速に衰えている、落ちているという問題を持って語ったつもりはありません。

そういうものが十全に機能する社会というのは、どこの国にもどこの時代にもなかったでしょうから、変わらぬ問題として発言したつもりで、今の日本で衰えているものとして語ったつもりはありません。それだけは最後に申し上げます。

(大谷) 有栖川さんの意見がやはり面白いと思います。僕は見方、考え方としてはよくわかると同時に、でもやはり今、僕自身が持っている時代に対する閉塞観というのは否定できません。それはいつの時代もおそらくどの地域でもあると思うのです。ただ、普遍的なことと同時代的に起こっていることをどう見ていくのかという時に、やはり僕がいる現場、あるいは自分の経験というものとどうしても照らし合わせてしまうのです。

そのときに、これは昔がよかったという言い方ではなくて、例えば僕が育ったのは大阪の中心の下町ですが、近所にたくさん子供がいて、皆苗字で呼ばなくて、八百屋のゆうちゃんとか、石屋のゆうちゃんとか、散髪屋のだれそれとかと、屋号で呼んでいるような文化がまだあったのです。その頃に悪いことをすると、質屋のおばちゃんが灸(やいと)を持って僕を追いかけるとか、そういうコミュニティとコミュニケーションが人間力と非常に関連しているのではないかと思います。

それでは、豊かなコミュニティとして昔の町内を今復活させても、それは似非町内になります。今、新世界などが変なのは、串かつ屋がたくさん出てきて、全部デザインが昭和レトロだからです。それと同じことをやってはいけません。

ただ、人間力といったときに、人間のエネルギーが中心になった社会は近代の中で、ある言い方をすると失われてきたものです。例えば江戸時代というのは僕は日本の中では非

常に面白い時代だと思っていて、歌舞伎などにしても反体制的な文化がきちんと成立している社会だったと思うのです。別に幕府が支援したわけではなくて、むしろあからさまに、例えば大石内蔵助を大星由良之助にするだけでやってしまえるという、ある意味で余裕、余白がある社会、こんなことがあってもいいのだというような社会を今の時代でどう作っていけばいいのか。

そこに人間力がどう活かされていくのかというのは、先ほど角野さんがおっしゃったように、3つの要素というのがそうだと思うし、そこを往来する力というのが、新しい文化と経済のシステムを作っていくということかと思っています。

#### (4) 総括～ワンオブゼムの再評価

(鷲田) ありがとうございます。ちょうど時間が来てしまいました。いろいろな意見が出ましたが、まとめなどは全然する気はないのです。

皆さんのお話を聞いていて、嫌だとか、しんどいと思うあり方、生活というのが2つ両極端にあって、1つは代わりが利かない自分にならないといけないという、オンリーワンにならないといけないという強迫というのは正直しんどい。普通はどんな場所で生きていても、大抵は代わりは利くのです。最後の最後、親子関係ぐらいが代わりは利かないとは思いますが、それぐらい強烈な刻印を残すかもしれないけれども、最近はもしかしたら親も代わりが利くのではないか思うくらいになってきて、代わりの利かないオンリーワンとしての自分を見つけないと生きていけないというのは大変しんどい生き方だと思うのです。

他方で、埋もれていたらいいのかというと、全体のパーツになってしまうような生き方も嫌だと思います。ある1つのパーツとしてのみ認められる社会というのも嫌です。その時に思うのは、報道される北朝鮮の社会などは、どんな危険な国家であろうとも、あれが社会として成り立っている限りは、もしかしたら大谷さんが言われたような、あそこのおっちゃんの何々というような関係が実は見えないところに、かろうじて成り立っているのかもしれない。ただ、完全にある1つの、何かの国家や社会のパーツになってしまうような生き方というのは、自分は絶対に嫌だと思います。

そのように考えると、残っているのは、普通は悪くいわれるワンオブゼムです。ワンオブゼムというのは個性がないなどとネガティブに言われるけれども、僕はワンオブゼムに満足できる、あるいはそこに輝けるものが必ずあるはずだと思っていて、ワンオブゼムというのをもう1回きっちり考えてみたい。そういう人間のあり方というのが実は一番いいのではないか。非常に抽象的な言い方だけれども、そこにしか僕らの居場所というのは探せないのではないかなという思いがどこかにあって、ワンオブゼムをもう少しポジティブに世の中がとらえられるようになればいいのではないかと思っています。

今日はいろいろな意見が交錯し、討論もあって、本当に楽しかったです。今回も議論を楽しませていただきました。どうも長時間ありがとうございました。

## 参 考 资 料

# 財団法人関西社会経済研究所

## 文化アドバイザー名簿

平成18年7月12日現在

(敬称略、氏名50音順)

- |                  |            |   |
|------------------|------------|---|
| ありすがわ<br>有栖川     | ありす<br>有栖  | 推理作家  |
| いのせくみえ<br>井野瀬久美恵 |            | 甲南大学文学部英語英米文学科教授                                |
| おおたに<br>大谷       | いく<br>燠    | NPO 法人 DANCE BOX エグゼクティブ・ディレクター                 |
| かどの<br>角野        | ゆきひろ<br>幸博 | 関西学院大学総合政策学部教授                                  |
| かわうち<br>河内       | あつろう<br>厚郎 | 文化プロデューサー                                       |
| かわしま<br>川嶋       | みほ子        | ロゴ有限会社代表取締役                                     |
| きた<br>喜多         | としゆき<br>俊之 | プロダクトデザイナー                                      |
| きたぐち<br>北口       | まさと<br>正人  | 株式会社阪神コンテンツリンク 常務取締役                            |
| こう<br>孔          | い<br>怡     | キャスター、ラジオパーソナリティ                                |
| なかにし<br>中西       | ひろし<br>寛   | 京都大学大学院法学研究科教授                                  |
| ねもと<br>根本        | としゆき<br>敏行 | 静岡文化芸術大学文化政策学部文化政策学科教授、<br>兵庫大学経済情報学部経済情報学科兼任講師 |
| まるやま<br>丸山       | けいご<br>啓吾  | HEP HALL プロデューサー                                |
| むらかみ<br>村上       | ともひこ<br>知彦 | まんが評論家、神戸松蔭女子学院大学講師                             |
| わしだ<br>鷺田        | きよかず<br>清一 | 大阪大学理事・副学長、教授                                   |

以上 14名

文化懇談会  
「人間力」について

禁無断転載

---

発行日 2006年(平成18年)10月  
発行所 〒530-6991  
大阪市北区中之島6丁目2番27号  
中之島センタービルディング29階  
財団法人 関西社会経済研究所  
Kansai Institute for Social and Economic Research (KISER)  
TEL : (06) 6441-0550  
FAX : (06) 6441-5760  
電子メール kiser@kiser.or.jp  
URL <http://www.kiser.or.jp>  
発行者 武田 壽夫

---

ISBN4-87769-092-1